

美濃陶磁歴史館だより



連続 うちんたあのお宝、なんやね？

コラム

第12回 御幸町の十王尊（土岐津町）

〜地域の人たちが守り伝えた信仰〜



土岐津町土岐口の御幸町内には、「十王堂」という仏堂があり、中に複数体の仏像からなる「十王尊」（市指定文化財）が祀られています。十王堂は、棟札の記録によれば、寛文13年（1673）に地域住民の手によって建立されました。その後、像の修理と堂の再建修理が繰り返されながら、信仰は途絶えることなく現在まで継続してきました。

「十王尊」とは、冥界で亡者の罪業を裁判する閻魔王を中心とする十王への信仰のことで、中国から日本へ伝わり、鎌倉時代に定着、次第に十王に対応する本地仏が定まってきました。本地仏とは、たとえば閻魔王は神となつてこの世に現れた仮の姿で、本来の仏「本地」は地藏菩薩であるということ、それぞれの王（神）に対応する本地仏が定まっています。

十王信仰は、江戸時代には民間



▶ 御幸町の十王堂に祀られた十王尊 ※ガラス越しに見学可能

信仰の形で全国へ広まり、村の辻や寺院の境内に十王堂が建てられるようになります。土岐市内も例外でなく、御幸町以外にも、いくつかの寺に江戸時代のもものとみられる十王尊像が残されています。

十王の彫像には、中尊として閻魔王、九王、眷族（閻魔王の従者）として司命、司録、俱生神、奪衣婆、人頭杖、浄玻璃鏡、業秤などがあります。御幸町の十王尊は、これらの彫像がほぼ揃っており、加えて制作年や修理が記録された棟札が付属しています。このように彫像が揃って残され、制作年が分かる例は珍しく、貴重です。

御幸町は江戸から明治時代にかけて、下街道の往来で賑わった地区です。神明峠への登り口付近、下街道に面した高台にある十王堂の中から、十王尊たちは街道の賑わいを見詰めてきたはずですね。

十王尊のうち（左から時計回り）
奪衣婆（閻魔王の従者）
閻魔王
業秤（閻魔王の持ち物）



特別展のご案内

小山富士夫と美濃
Fujio Koyama and MINO — With the history of craft design in the Showa period —
—昭和の窯業界のあゆみとともに—

【展期】 10.1 → 12.5
【休期】 12.9 → 2.13
土岐市美濃陶磁歴史館

美濃陶磁歴史館
(☎ 1245)